

もともと寺院僧侶を持つそのことが真宗の面目を失わしめているのである。このままでは他の宗派と何も異なるところがないではないか。宗祖の偉大な「非僧非俗」の立場が傷つけられているではないか。想うに、もし真宗が寺院を放棄してそれを道場に還元するなら、一段と新たな力を輝かすであろう。そして、この僧侶がその位置を棄てて、平の在家の信徒として立つなら、この宗派は著しい特色を発揮するであろう。『真宗素描』7)

柳宗悦は災害からの復興が速いことを真宗の特徴としてあげ、それが門徒の熱意によるものであることを評価しながらも、それだけではまだ真宗の本当の力が発揮されていないことを指摘しています。「還元」とは、辞書に「根源的なものにもどす、またはもどること」とあります。「非僧非俗」は僧(出家)と俗(在家)が二つに分かれる前ということで、二つに分かれたらもう根源的とはいえません。僧(出家)と俗(在家)が二つに分かれてしまえば寺院になり、「非僧非俗」にもどれば寺院が道場に「還元」されたこととなります。柳はこの親鸞聖人の「非僧非俗」の生き方を正しく受け継いだ姿を妙好人に見出し、それを「平の在家の信徒」と言ったのです。「平」とは、ももとの底辺という意味です。だから僧侶も門徒も平等に二つに分かれる前の妙好人に「還元」されれば、寺院は即座に道場となり、大谷派という宗派は、親鸞聖人や蓮如上人がそうだったように、如来から与えられたものすごい力(他力)を発揮するのであり、それは僧侶としての住職が門徒の熱意に依存して伽藍を復興することよりも、もっと大切なことだと柳は述べているのです。

第6章 親鸞土着と能登の土徳

西山郷史住職は能登の輪島市神明原という村を訪ねました。そこは過疎が進み、二所帯・三人のお年寄りが住んでいるだけでした。「いろんな行事がおこなわれなくなりますね」と話しかけると「若いものはこんな山には帰ってきませんしね」とあいづちをうつおばあさんの表情は、言葉とは違って明るいものでした。「あのこだわりのなさはどこからくるのだろうか？」と西山住職は疑問をもちました。それから8年してまた訪ねると、村人はさらに歳をとっていました。ところが不思議なことに、その田や畑の景色が、前にも増して色鮮やかで輝きを増しているように見えました。

第23代彰如上人(1875~1943)の俳句に「御講や一人の信に光る村」というのがあります。一人の信心がその村にもたらした光は、たとえ村人がいなくなっても消えませんが、神明原のおばあさんはその光を阿弥陀如来から与えられたものとして感謝し、信頼しきっていたのです。先祖への感謝・土に対する信頼、それをもたらすはたらきを土徳といいます。親鸞聖人がその土地に土着して、新たな親鸞聖人が次々に再生されていく力が土徳です。この土徳を原動力とするのが真宗の道場です。今の真宗寺院はお金を原動力にする傾向がありますが、それを土徳に変換するのが真宗の還元です。それはちょうど火力や原子力で電気を起こしていたのを、太陽の恵みをエネルギー源に転換するようなものです。